

詩作品（新作詩順）

四十八 ひとつの花

四十七 廻り舞台

四十六 めぐりゆくもの

四十五 こころを空に

四十四 見上ぐる日

四十三 花のように光のように

四十二 遠い歌声

四十一 ここにいないきみへ

四十 ぼくは はじめてのように星座を見つめた

三十九 宙のしずく

三十八 わたしが夢を閉じるとき

三十七 おくりもの

三十六 おかえり わたしのいとし子

※父 大岡信に献ぐ

三十五 挽歌 ― 父を送る―

※父 大岡信に献ぐ

三十四 ~~宙のしずく~~

三十三 注意報

三十二 星あかりの水路

三十一 ~~わたしが夢を閉じるとき~~

三十 扉と鍵

二十九 つるくさ

二十八 木洩れ日

二十七 飛翔

二十六 音の冒険

二十五 春告草 ― 秦琴がたり ―

二十四 ひかりの法則

二十三 花による鑑賞者のための独白

二十二 実りのとき

二十一	生きているのではなく
二十	子供のために必要なもの
十九	いざない
十八	短歌 光の館
十七	恋歌へリズム12・12
十六	道のり
十五	摘果の季節
十四	地球の絵具
十三	春のおとない
十二	手だて覚え書き
十一	還らぬ兵士への花束
十	わすれもの
九	たったひとつでも
八	結婚の日に

七 旅の掟

六 赦されざるもの ― 雨ニモマケテ ―

五 おくゆきのへりズム――

四 ブランコ

三 いのちのめぐりへリズム 17・14

二 扉をあけて

一 ことほぎのうた

ことほぎのうた

遥かなる光のみなもとから

妙^{たえ}なる調べをまとい

ひとの子は送り出される

その身にちいさな　　もし火を宿して

果てのない　いのちの悦びに

こころの青を育んで

愁いと飾りをすすいだなら

その身かがやいて　道しるべとなれ

世界からやさしさを受けとるため

世界をあたたかさで充たすため

あなたは　生まれてきた

扉をあけて

涼やかな風が吹くころ

あなたはまた新しい服に着がえた

ひととせに別れを告げ

ひととせを迎え入れる

春^{はる}夏^{なつ}秋^{あき}冬^{ふゆ} たゆまず織り継いでいたのは

生きる哀しみで染めあげた 経糸緯糸^{たていとよこいと}

とらわれた季節が 肌の温もりに

柔らかなあくびをした

夜が降りたち しじまが色を重ねる

姿ほのかになっても

あなたのなかの消えない炎

あなたを照らして揺れている

はにかみから溢れる いのちの言葉

ためらいから零^{こぼ}れる 歎^{なげ}びの息吹き

いつでも覚えていて

扉を開いたならどこへでもゆけること

あなたが逢いたいあなたに

いつかあなたが出逢えますように

あなたが祈る全^{まった}きしあわせが

この空すべてに響きわたりますように

いのちのめぐりへリズム 17・14へ

今日の日に　いくつの花が揺れるだろう

露たたえつつ香りをはなち

陽のひかり　浴びて孕んで露地充たし

春の息吹きをふりまきながら

今日の日に　いくつの波が寄せるだろう

耳朵を包んで肌逸はやらせる

潮浴びの　あだめく面照おもてり映えて

夏は昂り　空にみなぎる

今日の日に　いくつの風が渡るだろう

そよめきながら枯れ葉に触れる

ゆえなしに打ち臥すころ　差しだせば

秋が見つめる　ただそのままに

今日の日に　いくつの星が唄うだろう

雲をはらって調べはとどく

おだやかに 剣つるぎのように澄みわたり

冬はそびえる 新芽を抱いて

今日の日に いくつの笑顔咲くだろう

ぬくむ屋やぬち内に まだ見ぬ国に

哀しみが覆うときにも ほほえみは

黙してふかく染み込んでゆけ

祀られて 傷つけられて乱されて

なおも地球はめぐりつづける

たからもの捧げるように また明あ日すへ

今日を祝して織り込んでゆく

ブランコ

歩いていると急に視界がひらけて

そこだけ何もない空間に

ふたり乗りのブランコ

だれも坐っていないブランコ

手前には立て札

「ふたりでいることの

耐え難い孤独を知った人だけ

乗ることができます」

つづく二行に

幾度となく重ねられた

白いペンキのあと

饒舌に押し黙る余白として

赦されざるもの ― 雨ニモマケテ ―

雨にも風にも負けぬような

そんな強さなど望むべくもなく

見聞きしたことを理解し忘れぬような

そんな記憶力も持ちあわせておらず

だれかの役に立つことは出来ず

だれの役にも立たないことをやり

褒められもせず

大して苦にもされず

そうして自分にとって自分は

とくべつな一人である

でくのぼう とすら云われずに

せめて 自分を赦せるだけの

赦してもいいと思えるだけの

何者かになればと願いつつ

たったそれほどのことが

大それた望みに映る

かわいた陽射しの道の端^{はた}

旅の掟

ここから旅をはじめよう

右でも左でも上にでも

あるいは遥かな内側へでも

いまから旅をはじめよう

行こうと決めればどこへでも

心に訊けばわかること

忘れたならいつか思い出すがいい

倦んだなら深々と息を継ぐがいい

迷ったなら精霊たちと唄えばいい

ほんとうを言えば

旅はすべての瞬間に

絶え間なくはじまり続けている

結婚の日に

時充ちて　　ぼくのもとに来るひとよ

時充ちて　　ぼくと生きてゆくひとよ

ぼくらが今ここにいるのは

霧の山をのぼる険しさを

あかね雲が群れゆく夕暮れを

窓辺の植木鉢を照らす光を

滴るくだものの柔らかな肌を

これから共に分かち合うため

そのために　　ぼくらは今ここに

だれより近くに

やすらぎと裏腹の腹立ちも

よろこびと裏腹の怒りもあるだろう

それでも近くに

見直すだろう　　これまでのように

歩いてゆくだろう　手をたずさえて
たまには　そっぽを向きながら

花のように坐るひとよ

こぼれる笑みは水紋のよう

岸辺のぼくに到達するやいなや

この身体をすっぽり包みこむ

だからぼくは　こだまになる

浮き立つ笑みを響かせる　こだまに

あなたを識ったそのときに

ぼくは　ぼくに初めて触れた

あなたの温もりに赦されて

ぼくは　ぼくを解き放った

あなたを抱きしめていると

ぼくは　ぼくでいることができる

一万年前にも千年前にも　ぼくらは出逢った
そして出逢うだろう　はるかな未来でさえも
からだが無くなっても　かたちが変わっても
ふたたび惹かれ合うだろう　果たしてかならず
ぼくらはお互いを見つけるだろう　だから今は
空と海が白く交わる　このときの果てまで
おなじ舟を共に　漕いでゆこう

た　っ　た　ひ　と　つ　で　も

ふ　り　つ　も　る　雪　の　ご　と

森　に　舞　う　落　ち　葉　の　ご　と

は　ら　っ　て　も　　は　ら　っ　て　も

し　ず　か　に　強　く　降　り　て　く　る　問　い

こ　の　い　の　ち　　在　る　う　ち　に

た　っ　た　ひ　と　つ　で　も

だ　れ　か　の　心　に　　そ　の　糧　を

差　し　出　す　こ　と　が　で　き　る　だ　ろ　う　か
と

わすれもの

ひとがわたしを忘れているとき

わたしはかれらとともにある

わたしがかれらを離れているとき

わたしを浮かべるひともあるだろう

うすれた青^{せい}灰^{かい}色^{しよく}の空をくり抜いて

仲間のない三日月が透けている

まるで行き場がないように

夜への軌道を探る面持ちで

移りゆく暦の　そのたびごとに

空とともに　わたしも弓に射られては

望月のころには　また忘れ去る

鋭く つぎに射られるまで

新たに射られる そのたびごとに

思い出す はじめてのように

当てもなく歩いていると知る

うつむいて歩いているとわかる

曇天の朝 霧雨の昼 星のない夜

たゆまず心を照らしたなら いつか誰かと

微かな光さえ 捧げあえるのか

すぐそばの忘れものに気づくように

還らぬ兵士への花束

八月のパリ 区役所の広場に準備される

パリ解放七十周年記念式典

現役軍人 退役軍人 その家族 軍楽隊

戦没兵士の遺族 テレビカメラ 見物客

マイクに向かい語る区長の 低く通る声

還らない兵士 レジスタンス 焼かれた家屋

街を走りぬける戦車 ノルマンディーの連合軍

広場をつつんで立ちのぼる想念

斃れたのはだれ

だれかの夫 だれかの娘

だれかの恋人 だれかの母親

だれかの親友 だれかの弟

シナプスがわたしの中に 彼らを生んでいく

戦没兵士の碑にあでやかな花束が捧げられ

その瞬間 大理石として顕されたひとびとは

すでにわたしとして在った

広場にいる大人も赤ん坊も行進曲もささやきも

すでにわたしとなつて

わたしがわたしとして生きるとは

わたしでありわたしでないものの生に触れること

わたしでありわたしでないものの生を哀しむこと

わたしでありわたしでないものの生に委ねること

わたしでありわたしでないものの生で満ちること

わたしでありわたしでないものの生から

わたしとして寄り添われること

手だて覚え書き

たえまない攻撃から身をかわすなら

迷うことなく飛びこめ 塹壕に

壕のうえを行き交うのは

磨がれず放たれる言葉の槍

投げつけるための情動のつぶて

そんなものに惑わされず

深い穴から空だけ見つめている

耳を澄まして膝をかかえろ

棄てておけ 毒を含んだ酸素など

息をころし 気配を消せ

敵があきらめるまで

邪魔な思考なら止めておけ

感じる針だけ動かしておけ

見上げた視線は 横切るハヤブサに託すがいい

その目が世界中を巡ってくるだろう

湧き上がる咆哮は つぎの風に託すがいい

こだまが 世界中を駆け抜けるだろう

ふたたび

迷走せよ 嗚咽せよ 胸を張れ

空は おまえが吸いこむためにある

海は おまえが飲み干すためにある

羅針盤を錆びつかせるな

どこへ向かうか 何を指すか

絶え間なく見極めろ 刻みつけろ

その行為だけが おまえを形づくるから

神託は ゆっくりと

確実に

地表を覆いながら
降りつもつてゆく

―時を眠らせては
沈黙させては
なりませぬ
なりませぬ
―

春のおとない

風吹きわたる寒き夜

おぎろなき夢を夢みながら木々は

つかの間 休息をとる

胎内に したたる緑のいのちを

ひっそり たぎらせて

地球の絵の具

萌えて息づく街路樹

欄干が撥ね返す陽射し

雨を知らせて鳴く鳥たち

いにしえ人の朽ちかけた墓標

地球にくまなく具わる鮮やかな絵の具は

絶え間なくすべてを彩りながら

獲物たちをあるがまま生け捕っている

獲物たちがそうとは気づかないままに

摘果の季節

その指は だれの指とも似ていない

たったひとりの体温

たったひとりの脈拍

痩せすぎも太りすぎもせず

あなただけを ただ表して

そっけなさど熱情を操って

指はゆたかに舞台を醸す

そしてわたしは摘みとられる

自分では摘みとれないのに

はがゆく たやすく 摘みとられる

耳たぶの 紅いくだもの

それさえも容赦なくさらわれて

置き去りのまま わたしが聴くさざ波

摘みとられているというのに

こぼれながら実りつづけて

乾ききらない 胸の奥のひそやかな水

めぐるごとに内側を湿らせ

微熱を発する永久機関

そしていつしか 昇華するほど

あなたの指に同化する

かすかな地平線に横たわれれば

指先から中心まで すっかり実らせて

わたしがわたしを摘みとりはじめる

不規則なひらめきの向こうには

しっとり青白い 空の皮膚

その指は だれの指とも似ていなくて

道のり

おもいきり伸ばした腕は届かず

声を限りに呼んでみても遠く

じたばたしても黙考しても

近道抜け道ひとつないと知らされる

唯に歩いてゆくほかはない

かすかなけれど

たしかな輝きを放って待っている

わたしというあの光をめざして

恋唄　へリズム 1 2 ・ 1 2 へ

どれほど近い距離でさえ　あなたは遠いひとになる

抱きしめられた肩先で　目の焦点がむすべない

鼓動に右の手を添えて　左に揺らぐ傷を聴く

今日とどかない夢のなか　などか眼差し懐かしく

あなたはいつも一人ゆく　星から降って来たごとく

生まれていない歌声に　惹かれ奪われほほえんで

見つめられればはらはらと　散りそうに咲くこの身なら

いっそ弾^{はじ}けて宙に舞い　あなたをつつむ風となれ

風の面^{おもて}にふつつつと　だれも知らない清冽な

泉の湧いてまそかがみ　ふたりをさやに映しとる

だれかではないあなたゆえ たったひとりのあなたゆえ

痛みそのまま打ちあげて 空に充ち満たしてみせる

あなた総てを識らぬなら あなたはいつも近いひと

だからわたしはいつまでも 調べのように漂って

あなたがつくるあなたごと 夢のかたちを抱かれない

短歌 光の館

―「光の館 十首」(次頁)に添えて―

二〇二四年十一月、二度目の参加となる「しずおか連詩の会」に列なるため、静岡県三島市に五日間滞在した。例年は静岡市で開催されてきたが、都合により今年は、はからずもわたしにとっての父祖の地、三島にある「大岡信ことば館」が会場となった。祖父・大岡博は歌人として三島に生き、父・大岡信は詩人となる萌芽をこの地で育んだ。

三日間をかけ五人の連衆で連詩「光の館」を巻き終え、感慨と高揚と悦びを持って締め括ることができたのは、関わった人たちすべての心ばえの賜物であつたとつくづく思う。感謝を込め、のちのちもこの日々を思い出す個人的よすがではあるが、拙きうた十首を次頁にしるすこととした。

2014年しずおか連詩の会

創作期間・2014年11月13日～15日

―参加詩人―

野村喜和夫(詩人)

覚和歌子(詩人・作詞家)

東直子(歌人・作家)

木下弦二(音楽家)

大岡亜紀(画家・詩人)

光の館 十首

思ほえず誘はれたる父祖の地の瀬音に構へむ ひかりのやかた

星からの呼びかけのごと言の葉は座に降りたちてはまた舞ひあがる

* * *

野村喜和夫氏 連詩の捌き手として

詠みつぐと思しさだめしきみの手の大やかにして連詩を合へ貫く

東直子氏 三嶋大社にて

うたびとはうつつを絡げて鹿の眼に神の泉を透かしみるらし

覚和歌子氏

祝ぎうたを後世への橋とし掛くるひとは揺るる羽衣をまとふがごとし

木下弦二氏

ひこばえの夢みづみづと添はせつつ高嶺越えませきみのうたごゑ

河合弘倫氏

事しげき身なれど笑みも爽やかなるきみつぶやきし艶なる戯れごと

杉山朋子氏

カルガモの母さぶるひとに列なりて煩ひなくして道ゆく五たり

内山泰守氏

絵の色や手法のさまざま問ふ声のあたたかくして我ゆるびたり

橋爪充氏

ペン先に数多のこたへの調へり つばらにして凝るわれらの詩情

いざない

歩くためだけに歩いていたら

いつしかわたしは

絵のなかの森に足を踏み入れていた

小暗い木々をすり抜け進んでいくと

下草の生い茂るその先に

まぶしい一本の道が立ち現れた

その瞬間 すべての音は消え去り

木の葉はそよぐのをやめ

小鳥のささやきもなく

風は遠くで立ちどまり

けれど まっすぐ行けと

道の手ざわりを刻みながら行けと

じかに伝わる響きを たしかに

わたしは聞いたのだった

ひと呼吸のあと 音が戻ってきて

わたしは浸っていた

沁みこんでくる緑の香りに

枝をゆく大気の軽さに

わたしは浸っていた

洩れてくる青空の密度に

行き先の見えないまぶしいものに

おのずから輝いて白い道がつづいている

そしていつかその先でわたしは

わたしを待っているわたしに

かならず出会うことだろう

子供のために必要なもの

家を失った子供に必要なのは

憎しみを覚えることなく

安心して眠れる温かな場所と毛布があること

親を失った子供に必要なのは

武器を手にとることではなく

息苦しいほど抱きしめてもらうこと

希望を失った子供に必要なのは

自分の価値を貨幣に置き換えるのではなく

よりよい道をできるだけ多く教わること

友達を失った子供に必要なのは

我慢して涙を拭うのではなく

誰かとその子の話をして思い切り泣くこと

健康を失った子供に必要なのは

辛そうに見つめられるのではなく

そばにいてくれる温もりをもらうこと

陽気さを失った子供に必要なのは

どうしたのか訊ねられるのではなく

途切れがちの言葉をただ受け止めてもらうこと

いまを失った子供に必要なのは

砕けたすべてを拾うことではなく

星の瞬きに未来を重ね合わせることに

すべての子供たちに必要なのは

ひとりには幸せでいる自由があると知ること

そして

世界は今この一瞬で固定しているのではなく

ひとの思いを象っては様々にうごめくまるで

生き物のようだと教わっておくこと

生きているのではなく

呼吸をする

大笑いする

歩いたり走ったりする

話しこむ

見つめてみる

飽かず風景を眺める

嬉しかったり

倦んでみたり

ときどきあくびもする

生きている

生きているわたしはいのち

田んぼ一面に降るぬるい小雨

生まれては消える水紋を

育ちざかりの苗が味わっている

木枯らしの吹く公園で

野良ねこが触らせてくれた

砂まじりの背中のぬくもり

痛いほどに晴れた夜空

落ちてきそうに輝く星座

眩しすぎる　　ひかりの雫

そのすべてをつくったのは誰

すべてを包んで見つめているのは誰

その気配を察した瞬間にわかったこと

「生きている」のではなく

生かされている

生かされている　わたしは

ただひとつの　いのちとして

実りのとき

—丹阿弥丹波子版画作品によせて—

その日記は空をあおいで繁っている
照りつける陽射しの日も
雨つぶが叩きつける日も
繁ることを目指して繁りつづける
刻まれるのは呼吸と残像
削られた瞬間方程式は分解される
その行方には名前でも象形でもなく
装いはぎとられ素顔で立ちつくす
ただひとつの解
消えゆくものと過ぎゆくものは
みずからを祝して
肥沃な日記へ身をひるがえす
はるかな符号となるために
空をあおぐ日記のなか

熟れた屍は永遠とわのいのちを獲得し
捕えられた大気はかるやかに巡り
交わってささやき合う
解が繁りだすとき 次元は実りはじめる

※2014年、ミューゼ浜口陽三・ヤマサコレクションにて開催された「浜口
陽三・丹阿弥丹波子二人展 はるかな符号 大岡亜紀の詩と共に」に寄稿

花による鑑賞者のための独白

—丹阿弥丹波子版画作品によせて—

いつ　ここに来たのか憶えていません
なぜ　ここにいるのかもわかりません
でも　ここはわたしの棲み処なのです
そう　ここであなたと対話するための

はじめて目をあけたあの日のわたしを
のこらず染めつくした　あらゆる兆し
かがやく翳りさえ帯びて霧雨のように
わたしを包みこんだ　あらゆる歓び

川べりに揺れてそよぐ青草のにおい
ふいに立ちのぼっては踊る土ぼこり
触れそうにかすめてゆく鳥のはばたき
呼ばれている気がする雲のかたち

そしていつのまにかそつとさらわれて
すべてとともに　わたしはいます

からだをつらぬく律動も気配も沈黙も
つややかに光る ひとつの色を組織しながら

脱ぎ捨てて 割れて ほほえんで

身のうちを晒し 深淵に抱きとめられ

わたしは息づき かぐわしい酸素を放っています

かぎりのない源泉から ほとばしるように

そしていま 虹よりあかるい愁いに充ちて

わたしはそつと問いかけましょう

たたずんでいるあなたという広がり

真実をもうひとつ 告げるために

※2014年、ミューゼ浜口陽三・ヤマサコレクションにて開催された「浜口
陽三・丹阿弥丹波子二人展 はるかな符号 大岡亜紀の詩と共に」に寄稿

ひかりの法則

— 丹阿弥丹波子版画作品によせて —

おだやかなリズムを刻んで
糸巻きがまわっている
ひかりが長く細い糸になって
まるく絡めとられていく
編まれた籠を充足させ
折れては水を支配し
果実も野菜も小枝も
眼差しまでも照らしだす ひかり
そのひかりを やさしく集めては
糸巻きがまわっている
束ねられたひかりは
ふたたび生まれるため 闇に還される
闇は 重く黙りこみ出産する
輪廻を映す そのたびごとに
すると いのちの糧は解かれて循環し

透 明 な き ら め き が 散 ら ば り は じ め る

や が て き ら め く も の は 解 か れ て 循 環 し

時 を 追 い こ し 籬 が は ず れ だ す

ひ か り は み ず か ら を 解 い て 循 環 し

果 て し な く 膨 張 す る 引 力 そ の も の で あ る

※2014年、ミューゼ浜口陽三・ヤマサコレクションにて開催された「浜口

陽三・丹阿弥丹波子二人展 はるかな符号 大岡亜紀の詩と共に」に寄稿

春告草 はるつけぐさ

— 秦琴がたり — しんきん

※秦琴——古代中国にその起源を持つリュート系弦楽器。胴体部が梅の花の形をしていることから「梅花琴」とも呼ばれる。

早春の宵。上海にほど近い街の、喧騒から閉ざされた小さな音楽堂。雨があがったばかりで、湿り気を帯びた空気が漂う。

舞台には蠟燭を模した照明が二十本ほど、手前を中心に置かれている。それぞれ薄い手漉き紙で覆われ、透かして洩れる光が、滲むようにあたりを浮かび上がらせている。

舞台の左右に置かれた、高さ一メートルほどの黒い筒状の花器には、アーチがかった見事な枝ぶりの、咲き分けの梅が活けられている。二本の木は互いに、舞台中央に向って紅色や薄桃色、白色の花を競わせるように咲かせ、背景を成している。

秦琴を抱え、ゆっくり舞台の真ん中へ歩みよって椅子に腰かけた男性に、スポットライトが当たった。梅の花をかたどった楽器の胴体部には、堅牢な絹の弦が張られている。観客が見つめるなか、彼は軽く礼をすると、最後の確認のためのチューニングを行い、指を三本の弦にあてがった。弾かれた弦から妙なる音色が流れ、低く通る唄声が響きはじめた。

（男声歌唱）

梅の花ほころびて

香りたゆたふ月かげの道

きみとあゆめば春満ち来らし

梅の花ささめきて

香り深まる果てのなき道

きみとあゆめば春満ち来らし

幾^も百^と年の幾^{いく}人の

添^はひて奏^はでし琵琶^{いと}の弦

春^は告^る草^{つげ}なる名^なの花^はのごとき

かぐはしき音^ねを今^{いま}きみに捧^たげむ

梅^{うめ}の花^はそらに舞^まひ

香^かりゆたかに照^てらさるとき

きみこそ春^{はる}とわれ見^みつたり

（女）

―見^みつけた・・・漸^{やうや}く見^みつけた。わたしの夫^{つま}。

そなた、どこにゐたのか？ 捜^{さが}すのに難^{がた}儀^ぎした。だいぶん時^{とき}が経^へ

つたやうだが・・・。

幸^{さい}ひ、その音^{おと}色^{しき}、変^{かは}はらぬその音^{おと}色^{しき}と声^{こゑ}に導^{おし}かれた。なう、なぜ
に唄^{うた}ひつづけてをる？ こちらを見^みぬのか。

・・・あの時^{とき}。いかにも、あの時^{とき}わたしは、そなたが待^{まち}つてゐる

ものとばかり。従^{したが}者の居^をらぬ間に、急^{いそ}ぎそなたの許^{もと}へ行^いつたが、

そなたの姿^{すがた}はなく、見^み失^しふて・・・。

・・・はて、わたしは、どこから発^はつたのだつたか。

（男声歌唱）

溢^{あふ}るる花^{はな}を薰^{かほ}らしめ

きみゆゑに唄^{うた}ひたし

永^と遠^はに移^{うつ}ろはぬ想^{おも}ひを

証^{あか}すためなればこそ

よろづの言^{こと}の葉^はたぐりて

幾^{いく}たびも伝^{つた}へたし

永^と遠^はに移^{うつ}ろはぬ想^{おも}ひを

証^{あか}すためなればこそ

匂ひやかなる花 川^{かわ}面に散れど
さやかなる言の葉 川面に散れど
流れゆく旅のその末に
海に結びて光とならむ
散りゆくすべてのことわりは
ふたたび実りて輝かむ

（女）

――然^さなり。そなたを知り初^そめたるあの日も。

わたしが旦那様のもとに連れて来られたのは、十四の春。戦^{いくさ}で父上はじめ一族が滅ぼされ、ひとり残されたわたしは、長江の遙かな流れを揺られ揺られ、戦利品として運ばれたのだった。元の身分があるゆゑ、奥様の次なる扱ひを受けはしたが、側女が多くゐることは争ひの種も絶えぬといふこと。屋敷で折々に催される樂の宴が、どれほど楽しみだつたことか。

連れて来られて一年^{ひととせ}の頃であつたなう。十八のそなたが樂士として現れたのは。梅の花の舞ひ散る、風強き日であつた。暮れゆく庭園は、えも言はれぬ香りに満ちてをつたなう。

そなたの奏でる秦琴の麗しき音^ねは、場に集ふ皆を虜にした。だがわたしは、そなたの眼差しが湛^たへるものまで捉^たへてしまった。ひとり世を渡りゆく哀しみ。等しくわたしも抱かねばならぬ苦しみであつた。我らが出逢ふたあの日のことは、忘れ得ぬことよ。

（男声歌唱）

悠^{はる}かなるふるさとの碧^{あを}き山
ただきは雲を抜け天界に臨^{のぞ}む
厳しき山肌を滑り清らかに降りる風
いまは如何^{いか}にかあるらむ

懐かしきふるさとの泉には

夭^{えう}夭^{えう}たる乙女ら歌声ひびかせ

うち連れて飛ぶ鳥たちの琅琅たる鳴き声
いまは如何にかあるらむ

悠かなるふるさとを照らす月
今宵またこの国を冴え冴えと照らし
家路を恋ふわれの胸に影は浮かびあがりて
いつか帰る日あらむか
いつか帰る日あらむか

（女）

―そなた、そなたもあの日、わたしを心に留めたのだった。のちに、
おなじ身の上だと、心をこめて伝えてくれたその声を、今もわた
しは憶えてをる。それからわたしの髪に触れた、そなたの吐息。
あの時が、永遠につづく命そのものとなった。我らはあの時、永
遠に離れぬものとなった。ひとを慕ふことを、わたしが初めて知
った、あの日。さあ、唄ふてなどゐないで、こちらを向いておく
れ。さあ。

（男声歌唱）

花の香りの漂へば
触れらるる心地して
かの人を思ひ出す
かの人はいまさねど

波に星ぼし照り映えて
ふと誘はるる涙
かの人声聞こゆ
かの人はいまさねど

花も星もはや離れど
いとど増さるころは

かの人をなほ抱く^{いだ}
かの人はいまさねど

（女）

―なぜ？　なにゆゑそのやうに唄ふてをる？　ふたりは永遠に離れぬもの。

・・・永遠に離れぬ？　・・・それなら、なぜわたしはそなたを捜しつづけねばならなかったのか：・・・離れぬはずのそなたを：・・・。

（男声歌唱）

夏は陽に喘ぎ^{あへ}冬は雪に閉ざさるる大地にも
季節はめぐり黄金^{こがね}に実る恵みの稲穂

遠き旅人の恙^{つつが}なく幸くと祈りてをれば
星座はめぐり珍しき文つひに届かむ

去りゆくこの身はめぐること能はず^{あた}種も留めず
はかなき夢を抱きたる^{いだ}まま命を散らす
存^{ながら}へばなほ憂さ募る世と思ひ絶えなむ

（女）

―そなた・・・もしや・・・そなたは殺された？

そなたは、そなたは・・・縊^{くび}られた？

なぜ、そのありさまをなぜ、わたしは憶えてをる？

どうしてそなたは、首に縄を巻かれ・・・息絶えて・・・をつた？

（男声歌唱）

去りゆくこの身は　めぐること能はず種も留めず
はかなき夢を　抱きたるまま命を散らす

(女)

―唄ふてゐないで、説き聞かせておくれ……。
なう、そなた……。あ……。どうしたこと……。
どうしてわたしの手は、そなたの身体をすり抜ける？
そなた、そなた、何が起きてゐるのか。わたしはいつたい……。

(男)

―……。聞こえますか？……。わたしの声が聞こえますか？

(女)

―……。誰？　そこに誰かをるのか？

(男)

―ああ……。つひにわたしの声が届きましたね。長いあひだ待った
甲斐があつたといふもの……。

(女)

―誰、そなたは誰？　そなたは、もしや……。

(男)

―さうです、わたしです。ずっとおそばで、気づいていただけの
を待つてをりました。

(女)

―そなた……。本当にそなたなのか？
では、ここで唄ふてをるのは……。

(男)

―わたしではありません。彼は「現代」の漢をレシです。

(女)

―現代？現代とは何のことか？

（男）

―我らがこの世の者でなくなつてから、もう久しいのです。大河でさへ形を変へるほどの時が流れました。あなた様はお認めになりたくないでせうが、お心の中ではご存知のはず。

（男声歌唱）

去りゆくこの身は　めぐること能はず種も留めず
はかなき夢を　抱きたるまま命を散らす
存へばなほ　憂さ募る世と思ひ絶えなむ

とき越ゆるのちに　ふたたびの通かよひ路ぢあるを願ひて
花は散りゆく　香りをのこし情けをのこし
存へばなほ　憂さ募る世と思ひ絶えなむ

（女）

―・・・この世の者ではない・・・ああ、さう、さうであつた。わたしも殺されたのだつたね・・・。我らのことを旦那様に告げた者があつた。
そなたが殺されたあと、わたしも引き出された・・・。後ろ手にまはされ、さすがに旦那様に合はせる顔はなかつたが、あの時はただ、ひとときも早くそなたの許に行きたい、その一心であつたことよ。

（男）

―わたしはその時、あなた様の上に浮かび、お待ちしてをりました。元より、この世では結ばれぬ身。これからは幾久しくおそばにゐられるものと、安らかな心もちで満たされてをりました。
ところが、身体から離れたあなた様は、わたしのことが目に入らぬやうで、心許ない面持ちのまま、さまよはれ始めたのです。

（女）

―・・・さうであつた。まるで、従者の目を盗んで、密かにそなたに逢ひに行くやうであつたのだ。もう従者など居をらぬのに。そなたを追ふつもりが、頭の中は混乱してをつた。

（男）

―はい。わたしには、あなた様の胸のうちがよくわかりました。わたしを見つけれぬ焦り、恋人と引き裂かれ、若い身で殺されねばならなかつた悔しさ。運命さだめに復讐したいとさへ感じてをられました。さうして、その想ひが霧のやうにあなた様を包み、すぐ横にゐるわたしの姿を隠し、今の今まで遮つてをりました。

（女）

―そなたを捜しあぐねて久しく、もう復讐など忘れてしまつた。添へなかつたことは心残りだが、かうして逢へたなら、もう、悔しさなど詮無きこと。

（男）

―霧のやうな想ひが、あなた様のお心から少しづつ去りゆくのを、永らく見護つて参りました。さすればいつかは、わたしの声が届くやうになるだらうと。

（女）

―ああ、今は、そなたの声だけでなく、姿も見える……。そなた、まこと、そなたなのだね。

・・・そなたには触さはれるのだね……。触らせておくれ、その髪、その頬・・・その唇・・・。

（男）

―わたしを慕ふてくださるそのお心が、きつと今宵の樂の音に寄せられるだらうと願ひ、奏者のそばでわたしも唄ふてをりました。あなた様をお連れするため、久しくお待ちしてをりましたゆゑ。

（女）

―どこへ？どこへ連れてゆくと申すのか。

（男）

―永遠に離れずゐられるところでございますよ。ともにこの世にあらぬ身、もう我らは夫婦めをとなのですから。疾とく、疾とく、参りませう。

（女）

―その言葉、その言葉だけでもう、何もかもすべて救はれた。
早う、さあ早う、わたしを率あてゆけ！

（男声歌唱）

露つゆのこりたる朝あした　ほととぎす来鳴きぬ
たづさへて天翔あまかけりゆく　われらが門出
きみが袖よりこぼるる花びら

冷たく霧きりわたりて　道行みちゆき難かたければ
われ琵琶びばの音ねを枝折しをりとし　きみ誘いさなはむ
天路あまぢを照らす　もしびのやうに

花映したる琵琶よ　時とき分わかずひひけよ
清らかなるきみを抱いだくは　常なる岸辺
まことまほろば　匂ひ立ついのち

天あまの河原の流れ　汲みて地に注げば
常ならぬ世はしろがねの　なみだ雨降る
われらが岸に　花の咲き乱れ
われらが岸に　花の香り満つ

音の冒険

弦がはじかれると　音は

大気のを貫き　猛然と泳ぎだす

触れるすべてのものに関わりながら

関わるすべてのものを目覚めさせながら

音が　おのれの限りなさに目覚め

まだ見えぬ到達点を見据え　そして

まどつてゐる波を脱ぎ捨てたとき

否応なく飛び込むのは

ヒトの耳殻という

果てしなく深くて遠い

見知らぬ謎の入り口である

飛翔

わからないまま 歩いていた

切り立った崖の道

わからないまま 歩いていた

自分の指も見えない闇のなか

わからないまま 歩いていた

知らないから怖さもなく

怯えもせずに無知なまま

何かにつまづいて立ち止まる

いったいどこにいるのだろう

どこに向かっているのだろう

気づけば頭の片隅で

幽かにささめく小さな光

ことばによらず 意味を降ろしながら

消えそうに震えている

感じる 見つめる つかむ

すべて すべてのことわりを

つくるのはお前だと

選ぶのはお前自身なのだと

ささめいている

皮膚のまわりを風が漂いはじめた

促されるように やがて

きのう折った折鶴が

ひらいた窓から飛び立っていった

木洩れ日

あなたの手のひらは

やわらかくて温かい

ときどき触っていたい

とおい日に戻って

あなたの声の

包みこむ温かさ

揺られて眠っていたい

子守唄のようで

あなたといういのちが

背負っている切なさのぬくもり

さびしさに裏打ちされて

たしかに息づいている

わたしは木漏れ日になって

あなたに降り注ぎ

気づかれず温めたい

黙して広がりながら

つ
る
く
さ

つ
る
く
さ
し
な
や
か
に

ま
と
わ
り
つ
い
て
か
ら
め
と
っ
て

夜
明
け
の
水
滴
に
う
っ
と
り

だ
れ
を
も
意
識
な
ど
せ
ず

自
足
す
る
永
遠

扉と鍵

扉が閉まっていたので私は

「扉をあけてください」と

扉の中に向って頼んでみた

中から声が返ってきた

「どうぞお入りください」

試しても ひらかないので再び声をかけた

「鍵がかかっているみたいです」

すると中の声はこたえた

「扉に鍵穴なんてありませんよ」

幾度かのおなじ応答があつて

困りきった私は ほかに方法がないか

思案しながら首をかしげた

すると風景の角度が変わり　ふいに

扉の向こうが透けて見えた

奇妙なことに　そこには

鍵を手にした私がいて

「でも　鍵穴なんてありません」と繰り返していた

向こう側の私は　どこにも差せない鍵を握りしめ

困り顔で立ちつくしていた

星あかりの水路

ぼくの手に凍る哀しみは

きみに触れるたび

居場所をなくして解けてゆく

ぼくに揺れる夢と怖れを

きみはためらわず

大事そうに両手でつつむ

ひとり歩いてきた砂地に

足跡は消えて

ぼくはもう　ぼくから逃げない

星影に導かれたのは

きみという水路

天然色が戻ってくる

きみは安らいでぼくに降り積もり

ぼくもまた だれかの水路なのだと

世界を潤すひと筋なのだと

水面^{みなも}に光って気づかせてくれる

注意報

今日のつもりの昨日を生きると見えなくなるもの

今朝 日差しに染め直された街の顔つき

今日 砂漠に生まれたばかりの砂あらし三粒

さつき 碎ける波が巻き上げた海のいろ

いま 森に仲間入りしたひこばえの柔らかさ

きのう触れたはずの あの人のところ

挽歌 ―父を送る―

―父 大岡信に献ぐ―

父 大岡信、二〇一七年卯月五日、齢八十六にして逝く。折しも、好みし西行のうた「願はくは花のもとにて春死なむその如月の望月のころ」に倣ふかのやうな、桜花に満ちた朝のこと。あな、あはれ

願はくは明かく照らせよ花ふぶきそは父ひとりあゆみ初む道

なつかしき雫となりてかへりませまことのふるさと言の葉の海

たまきはるいのち捧げて書き継ぎしやまことばとなりまさる父

をりをりのうたを枝折りに置きたまふ身罷りし人はや見えねども

武家の裔として生れたる長男を、うた人なりける祖父大岡博、
「我が家の太郎」と呼び習はしたり

もののふの家に生まれし太郎なりひたみちにゆく黄泉比良坂

おかえり わたしのいとし子

―父 大岡信に献ぐ―

わたしの息吹きよ おかえり

わたしであるものよ おかえり

またひとり 舞い戻ってきた

咲きこぼれる桜を手繰って手繰られて

はらからの待つふるさとへ

おかえり いとし子よ

一九三一年二月十六日

富士の胎内に昂る火は営々と水を濾過し

黄道みずがめ宮に太陽はあつた

いにしえからの約束をわたしが

おまえの眼差しにそつと置いたのは

摂理が鮎の背びれに光るその朝

初夏の田んぼのめざましい蛙の筋力は

知識と智慧との甚だしい距離のしるし

没落士族の庭の訓をもどもぞ聴く膝小僧^{おしえ}

あの小枝はミミズを掘るのにうってつけ

父親の書棚に揺れるさざ波を潜ればいつも

意味と意思をつらぬいて広がっていた豊饒

わたしは あめつちに注ぐいのち

わたしをそこなっていた事どもが

だしぬけに斃れたあの夏 八月十五日

生き存うよろこびと夭折できぬ戸惑いが

青すぎる空の下 おまえに満ちて噴きだした

濾過された水として

まこととは 真の言の葉

まこととは 　いつわらぬこと

まこととは 　詩を生きること

浅ましく記すことなく

貧しく語ることなく

世界と視界 　二重写しの漆黒に針孔を穿ち

因果にゆだねられた種子と

自然^{じねん}からなる営みを確かめつづけた

それから時々わたしを口寄せた

万葉びとも平安びとも 　そのうたが

だれかに留まるかぎり今なお生きる

依り代の言の葉にそよいで

解いた現し身を越えて生きる

だからいつか 　おまえもうたうだろう

はるかなことばになつて

小鳥のさえずりと雷雲の兆しを巡れ

刻まれる一瞬と　一瞬に裏付けられる久遠に遊べ

不在によつてこそ人のくちびるによみがえるものとなつて

うたえ　おまえのために　わたしのために

さあ　水瓶に水をたたえよ

ふたたび　あめつちに注がれるものとなるために

おくりもの

わたつみの夜のかんばせに

散りまじり踊るきらめきは

月かげの清かなしたたり

さざ波にそそがれた光

ことごとくがそのままに在る

たゆまずめぐるもののうちに

ちがう言語のおなじ気持ち

ほんのりぬくもる風のいろ

せつない調べが流れれば

こどものわたしが目を覚ます

ふと気づくことに出逢うたび

こころ灯して降り積むもの

にぎってくる幼な子の指

あくびの仔猫の乳くささ

さむい枝をひらく初^{うい}花^{ばな}

うつむいた水たまりに月

見るもの聴くものの触れるもの

透かさなければ抱^{いだ}けぬもの

捨ててしまいたい記憶ごと

消えたいと希い一つもなお

空の高みのその先まで

たしかめるように手を伸ばす

明日もしいなくなるとしても

昨日も今日もあつたこの身

眠れぬ耳が鼓動を聞く

遺伝子の遙けき道のり

原始の震えをたずさえて

わたしはわたしを生きている

ふりあおいで今ここにいる

たゆまずめぐるものとともに

わたしが夢を閉じるとき

歌声になった茜が空にひろがる

街の昂りは風にととのえられ

仰ぎみるわたしを夕陽が見下ろす

ひと日のおわり

天と地はたゆまず回りつづけ

星々のさざめきがまた遠のく

仰ぎみるわたしを迎える日輪

ひと日のはじまり

大きく深く息をすること

今この瞬間を生ききること

わたしたちに許されているのは

本当は たったそれだけ

わたしが夢を閉じるとき

夢がわたしを折り畳むとき

眼裏に寄せる波音と

交わした言葉だけを

わたしは纏っていくだろう

道を照らしてふるさとへ招く

あの歌声に導かれて

宙そらのしずく

宙のしずくが蒔かれて星になると

満ち足りた闇は黙して唄い出す

流れゆく音色は祝福のことわり

いのちの美しさを象かたどってゆらめいている

消え残る感喜と後悔を抱きしめて

だれもが独り歩いている

みずからの美しさを知るひともし知らぬひともし

ただひとつだけの灯りをともして

宙のしずくに耳をすますと

あの始まりの光として連なってきた

私たちという結び目が

満ち足りた闇をなつかしく包んでいる

ぼくは はじめてのように星座を見つめた

“祈りと涙と 神話がなければ”と
あなたは言った

ぼくは走ってきた 独りきりで
いつも走ってきた 一人のつもりで
ほんとにひとりなのか考えもせずに

光を遮る闇を怖れていること
闇を暴く光を怖れていること

見ないふりで走ってきた 心地よくて

闇のなかにしか光は宿れない

光のなかにしか闇は潜めない

泥の水底を浚^{さら}えば 指にきらめく砂

抗えぬ力で夜に配された恒星は

おのれを燃料に輝きつづける

はるかな未来に迎える死のために

オリオンの彼方に用意された柔らかな寝床
還るための日々 還るための旅だ

ぼくは はじめてのように星座を見つめた

*
*
*

“祈りと涙と 神話がなければ”と

あなたは言う だから

光と闇であるあなたの手を ぼくは取ろう

ぼくは はじめてのように星座を見つめた

ここにいないきみへ

時をわたる鳥は羽をたたみ

ものがたりは閉ざされた

木漏れ日は凍てついている

透き通るからだが ぼくをすり抜け

きみは いつまでも咲く花になった

ぼくは支えをなくした気弱な木

月明かりに立ちすくむ

いなくなつてから きみは

前よりも饒舌になった

ぼくを 問いに向き合わせるために

ひとは 答えを置き去りにして生まれ

辿りながら帰っていく

永遠は一瞬の中にこそ宿るだろう

ぼくはきみのいのちを生きていく

もしきみがぼくを見失ったなら

この大地できみの形した星を捜せばいい

遠い歌声

目を閉じて天と地を結べば

すべては鮮やかに映し出される

はるかな時の重みも

正確に織り上げられて

やさしさも後悔も

この身さえも瞬間の連なり

夥しい「いま」の残像を

見えない指先が掬いとっている

明日を縛りたくても

昨日にくじけても

いまを生きるほかはない

無数の轍が刻まれていく

今日まだ遠い歌声に

いつかそつと目覚めるために

花のように光のように

こころは夜ごと　ふるさとへ還る

8 6 4 0 0 秒の営みを脱ぎ捨てては

そしらぬ顔で戻ってくる　しのめ

ふるさとに置かれた記憶は

花のように光のように　浮かんでいる

すべてが　ものの見事に去るのだから

引き止められてはならない

陽炎を透かし見れば　隠された道

ふるさとに置かれた眼差しが

花のように光のように　照らしている

見上ぐる日

真青なる明けの空

張り詰めた大気の

日輪に清しく染まりゆくとき

打ち付けに我がころ

果てなき高みに抱かれんと欲す

なれど空を観ずれば

そのはろけきこと気高く

その寛きこと限りなし

以てこの身の隔たりを識り

つつしみて希み胸に納む

而して

影が地に吸ひ込まれるゆふべ

われ 眼のみのものに戻れり

闇のすきまより尽くして

高きひかりをば覗かん

こころを空に

こころを空に住まわせると

肉眼が隠してきた景色が姿を現す

こころを海に住まわせると

いい加減な泳ぎ方が恥ずかしくなる

こころを夢に住まわせると

太古からの失意に育まれた憧れと喜びが

この星の鼓動となつて聞こえてくる

めぐりゆくもの

山肌は雷雨に清められ

砂地は陽射しに清められる

時がくれば渡り鳥は去り

時を知って蕾はひらく

だからわたしは――

風がこの身体を通り抜けるための

道をつくっておこう

廻り舞台

不器用に転んだなら

とりあえず明日へ虹をかけて

空を仰いでみる

ふと聞こえる 名も知らぬ人の言葉に

救われたりもする

ふるさとは 木漏れ日がきつと

乾いた土をキャンバスに

見事な映し絵を描いているだろう

ひとつの花

波音がひとときわ響く黄昏

手のひらから今日も

まだ温もる花をひとつ

足もとの波に託す

寄る辺なさげに揺られ

花はゆっくり遠ざかる

海中にはらはら沈むのは

昨日のようで違う 今日の花びら

ほどけながら沖へと向かう

生まれたその時からずっと

波に返してきた 日々の記憶

花びらはひとむらの漁火になるだろう

いつか摘み取られる私の

道を照らす 松明となるために